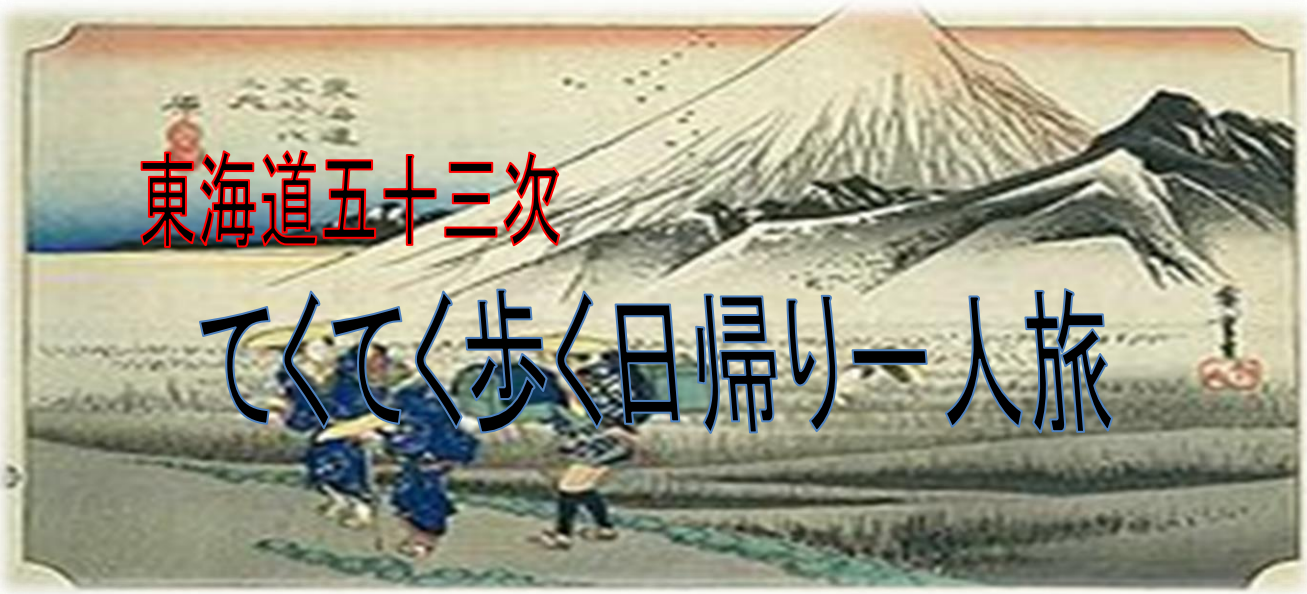

東海道五十三次　―知られざる穴場―　その⑪

逢妻橋を渡り１号線と合流してからの、三河の最後の地は現刈谷市。宿場のない街の冷淡さか、旧道への入り方が分からず難儀した。遺跡らしいものは何も残っていない。再び１号線と合流した後、右前方に旧道らしき道があり、足を踏み入れようとすると、「歩道がなく危険につき歩行者は１号線の側道を歩くこと」という刈谷市の警告板。無視してその道を辿ったお陰で、三河と尾張を分かつ境川に架かる旧東海道の境橋を渡ることが出来た。

尾張の最初の地は豊明市で、「国指定史跡阿野一里塚」と大きく墨書した標識と道の両側に２つ、ほぼ往時のままの塚。片側だけならこの先の笠寺の一里塚の方が、現在の茂り具合は立派であるが、両側に残っているところが評価されて、国の指定を受けたのであろう。

左桶狭間古戦場跡の標識を見て直進すると、「有松間宿と有松絞りの歴史」の説明板。有松は間の宿とは言え、広重は「鳴海・名物有松絞」と題して、この界隈の店を描いている。広重が土地の名産品を紹介しているのは、ここと我が故里水口宿の干瓢だけ。街並みには塗籠造り、なまこ壁のどっしりした店が軒を連ね、全国町並み保存連合の発祥地にふさわしい雰囲気を醸し出している。街道には有松山車会館と有松鳴海絞会館も並び建っている。

（歌川広重　鳴海宿）

さらに進んで扇川を渡ると、鳴海宿（40 番目）。かつては海道で一二を争う大きな本陣を有する宿場であったが、今では間の宿有松に観光客のお株を奪われ遺跡なし、訪れる人なしの、名古屋市緑区に位置する宿場。往時を偲ぶものは芭蕉

ゆかりの遺跡のみ。本町交差点近くの誓願寺境内に残る芭蕉供養塔は芭蕉 35 日忌に建てられたもの。隣りの芭蕉堂は永井荷風の祖父たちが建立したもの。さらに進むと千句塚公園があり、芭蕉の「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」を発句とする連句が千句成ったのを記念して、芭蕉生前に建った塚。

天白橋を渡ると東海道と知多郡道の分岐を示す道標。そのまま直進すると笠寺一里塚。塚全体を覆う榎の枝ぶりの豪快な一里塚。その先に笠寺観音の名で親しまれている笠覆寺。

見所一杯の大きなお寺だが、変り種のみ記す。墓地の中に織部灯籠と呼ばれている隠れキリシタンの墓碑があり、下方にマリア像が彫られている。墓地の入口には先述の、「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」の芭蕉句碑と、「宮本武蔵百年忌供養碑」が建つ。

東海道は笠覆寺の前の笠寺商店街を通り抜け、名鉄の踏切りを渡って右折し呼続の街に入る道筋。この呼続の通りには新しい道標が建ち並び、東海道ウォーカーには有難い。その１つ、鎌倉道との交差を示す道標で左折して少し行くと白豪寺がある。境内に、「年魚市
潟勝景の碑」の大きな碑が建つ。そう、ここは
「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし
鶴鳴き渡る」（万葉集・高市黒人）で有名な歌枕の地。さらに言えば、この「年魚市（あゆち）」なる地名が現在の県名「愛知」につながっているのである。さて元の道に戻って呼続に別れを告げ、山崎橋を渡ってから裁断橋趾の史跡に辿り着くまでの間が、呼続の地とは対照的に史跡皆無。大都会の海に溺れる思いでアップアップの道探しを重ねた。やっとの思いで、「水と緑と歴史のまち　宮地区」の大きな図板を発見。すでに宮宿（41 番目）に入っていた。

（歌川広重　宮宿）

少し先に、「裁断橋址」と「都都逸発祥の地」碑。以前に来たことはあるが、東海道という言わば線の上での点としての、この遺跡を訪れるのは今回が始めて。２つの遺跡の前の道を進むと、細い旧道のこととて信号がない。迂回しては信号の向こう側に戻り進む。その内に道は「ほうろく地蔵」が正面にある所で行き止まり。振り返ると古い道標がありここが右、佐屋街道との追分であることが判明。宮から桑名までの七里の長い船旅を苦手とする旅人の選んだ陸路が、この佐屋街道。陸路と言っても木曽川、長良川、揖斐川の３つの大河を越さねばならぬ難儀な街道。一方七里の渡しの方も、最短距離が七里であって、干潮の時は十里以上の渡しにもなったという。左の東海道を辿ると宮の渡し公園。東海道の行き止まりの宮の渡し場跡である。今は常夜灯と蔵福寺の鐘を復元した「時の鐘」、道の向かい側に脇本陣格の旅籠屋であった丹[illegible]会の寂しい遺[illegible]

（歌川広重　桑名宿）

桑名宿（42 番目）の広重の図から、当時、七里の渡しに帆船が就航していたことを知った。その渡し場跡だが伊勢湾台風の後、高い防波堤によって遮られ肝心の海が見えなくなったが、ここが桑名宿の中心で、伊勢の国の東の入口。東海道はここを起点に南に伸びる。渡し場の西には２軒の高級旅館が健在。手前が山月（船番所・脇本陣駿河屋跡）、奥が船津屋（大塚本陣跡）。船津屋は泉鏡花作『歌行灯』の舞台にもなった。「その名は桑名の焼蛤」で知られる地元産の蛤は、桑名沖での漁獲量が激減して、容易に口に出来なくなった由。

東海道を歩き始めるとすぐ、近鉄桑名駅から真っ直ぐ下りてくる道との交差点。渡ると船会所跡、伝馬問屋跡、丹羽本陣跡。やがて左手に桑名城の石垣が見える辺りに、「歴史を語る公園」があり、東海道五十三の宿場と富士山の模型が設えてある。その先の突き当たりを右折するのが東海道。その後、城下町のこととて幾つもの曲がりがあって、何度も迷った揚句、目印にしていた火の見櫓に辿り着いた。「矢田の立場跡」の説明板が下にあるやぐらである。ここを直角に左折した東海道は一本道で迷わなかったが、突き当たった町屋川に橋がない。左折して新道の橋を渡ってまた右折して、先ほどの続きと思しき道を探して左折、しばらく行くと一里塚跡の標識に出会ってホッとする。

その先、「東海道」の道標があるＪＲ朝日駅前を過ぎ朝明川を渡ると、四日市市富田。ほどなく、「史蹟富田の一里塚址」の堂々たる碑と説明板。かつての立場跡である。さらにその先には「間の宿富田」の案内図板。さらに進み海蔵川を渡る橋の手前に、「三ツ谷の一里塚」の碑と説明板。渡って堤防と分かれて下りて行く道が東海道で、藤堂高虎ゆかりの「笹井屋」という饅頭屋が健在。さらに歩を進めると文化七年(1810)の銘を刻んだ道標。「すぐ江戸道」の別の面に「すぐ京いせ道」。「すぐ」は「直ぐ」と読み取るべきであろう。

（歌川広重　四日市宿）

１号線を渡ると右手に諏訪神社。そこを左折すると道は細いが賑やかな商店街。横断幕が上に、道幅いっぱいの大きさで張られていて、「ここは東海道四日市宿」。すでに四日市宿（43 番目）に入っていたのである。その先で、近鉄四日市駅から南下している大通りを横切って進むとすぐに、作家丹羽文雄の誕生寺。少し先に、「東海道四日市宿→日永→小古曽→采女」の案内板。やがて日永一里塚跡と日永追分の道標。道標には「左いせ参宮道　右京大坂道」と刻まれていた。この後いよいよ杖衝坂に差し掛かる。「史蹟　杖衝坂」の碑。「徒歩（かち）ならば杖つき坂を落馬かな」の芭蕉句碑。上りきると、「血塚社」という名のお社。